文　化　財　学　習

ふ　る　さ　と　探　訪

テーマ：**水任流の史跡めぐりと泳法見学**

講　師：水任流保存会、穴吹　一雄

日　時：平成２９年７月２日（日）

大的場海水浴場（昭和２８年）

共　催　高松市歴史民俗協会
　　高松市文化財保護協会
　　高松市教育委員会

目　次

一　水任流保存会初代会長
　　松平頼明顕彰碑　……1
二　日和山神社　……2
三　水任流流祖之碑
（弘化年間高松城下図　部分）　……3
四　二間波止水門跡碑
（文化年間高松城下図　部分）　……6
五　村山籌子の碑
（明治三十年代游泳所写真、糸より姫像）　……8
六　第十二代師範三木嘉人歌碑　……10
七　水任流発祥之地碑　……11
図１　水任流発祥地を寛文年間絵図へ表示
図２　水任流発祥地を現代の地形図へ表示
図３　明治２８年及び大正１０年の高松城跡から
　　西浜にかけての地図

※泳法資料は、後ほど大的場で配付いたします。

【写真解説】

上右：福家師範浮身書
（H29.6.4 游泳祭 玉藻公園内堀）

上左：福家師範立游
（H27.8.23 第 60 回記念日本泳法
大会各流派模範演技披露 広島市）

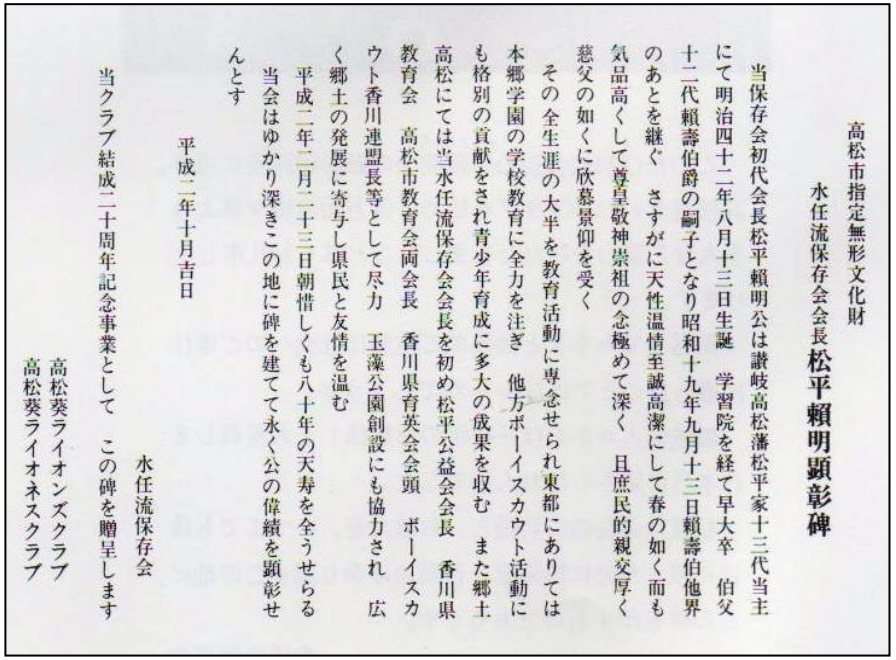
下右：上東準師範棒抜手游
（ 同 上 ）

一　水任流保存会（初代）会長 松平頼明顕彰碑

（平成二年十月十日建立）

まつだいらよりひろ（一九〇九～一九九〇）

高松松平家第十三代当主。昭和五十三年四月一日、水任流保存会結成と同時に会長に就任。現在の会長は十四代当主松平頼武氏。



高松市指定無形文化財

水任流保存会会長**松平頼明顕彰碑**

当保存会初代会長松平頼明公は讃岐高松藩松平家十三代当主にて明治四十二年八月十三日生誕　学習院を経て早大卒　伯父十二代頼壽伯爵の嗣子となり昭和十九年九月十三日頼壽伯他界のあとを継ぐ　さすがに天性温情至誠高潔にして春の如く而も気品高くして尊皇敬神崇祖の念極めて深く　且庶民的親交厚く慈父の如くに欣慕景仰を受く

その全生涯の大半を教育活動に専念せられ東都にありては本郷学園の学校教育に全力を注ぎ　他方ボーイスカウト活動にも格別の貢献をされ青少年育成に多大の成果を収む　また郷土高松にては当水任流保存会会長を初め松平公益会会長　香川県教育会　高松市教育会両会長　香川県育英会会頭　ボーイスカウト香川連盟長等として尽力　玉藻公園創設にも協力され　広く郷土の発展に寄与し県民と友情を温む

平成二年二月二十三日朝惜しくも八十年の天寿を全うせらる当会はゆかり深きこの地に碑を建てて永く公の偉績を顕彰せんとす

平成二年十月吉日

水任流保存会

当クラブ結成二十周年記念事業として　この碑を贈呈します

高松葵ライオンズクラブ
高松葵ライオネスクラブ

二　日和山（ひよりやま）神社

明暦年間頃（一六五五～）高松藩がお船蔵を築いたとき掘り起こした土砂を盛り上げて小山を造り、そこへ航海の守護神といわれる金毘羅大権現（大物主命）を勧請して祀ったもので、「お船蔵の金毘羅さん」とか「日和山の金毘羅さん」などと称され庶民に親しまれた。日和山とは、この傍らに藩の日和見番所があったからである。八代藩主松平頼儀の文化年間（一八〇四～）初めて庶民に公開された。【境内由緒書より】

かつての境内地は四百坪もあり、戦前の夏季大祭には市内近郷の善男善女が列をなして参拝、その数は数千に及び高松随一であったという。

立地は、お船蔵埋立後、明治三十年に開業した讃岐鉄道高松駅（後の国鉄高松本駅）北方であったが、国鉄用地拡張のため昭和三十二年八月現在地に遷宮された。

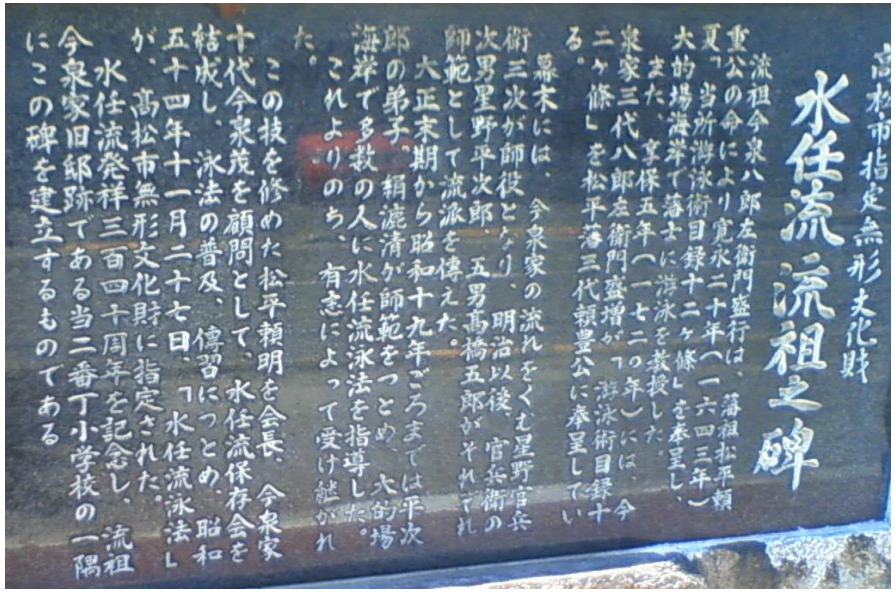
○祭神　大物主命・大山咋命・菅原道真・上筒男命・中筒男命・底筒男命

注連縄柱は大正9年に松平家11代当主頼壽(よりなが)伯爵が寄進したもの

三　水任流流祖之碑

（昭和五十八年八月八日建立）

＊流祖今泉家の屋敷跡の一部が敷地になっている高松市立新番丁小学校正門北側に建立されている（5頁・7頁の絵図参照）



■流祖今泉家略譜（高松今泉家系図による）

盛利　（今泉宗才）　常陸国今泉家

一　**盛行**　（今泉八郎左衛門）高松今泉家初代、水練初代師範「三百石大小姓」

二　盛貞　（今泉八郎左衛門）

三　**盛増**　（今泉八郎左衛門百助）水練三代師範、一六七〇年頃は普請奉行

四　盛照　（今泉八郎左衛門藤助）

五　盛庸　（今泉百蔵）

六　盛徳　（**今泉岡八**）…文化年間城下図（一八一〇年頃）に屋敷表示がある。

七　盛昌　（今泉来太郎）

子の一人　今泉三次が星野家の家督を相続し**星野官兵衛**と名乗る（水任流第七代師範）―**星野平次郎**（水任流第八代師範）―星野亀太―星野哲之助

八　盛績　（**今泉権八**）…弘化年間（一八四五年頃）城下図に屋敷表示があるが、三百石→百石に減扶持で屋敷地が半分になっている。

一八五六年「百石　御馬廻番組」とある。

一八六九年「第一砲隊単砲令司を務める」とある

九　新吾　警察官　一八六六年～一九四四年

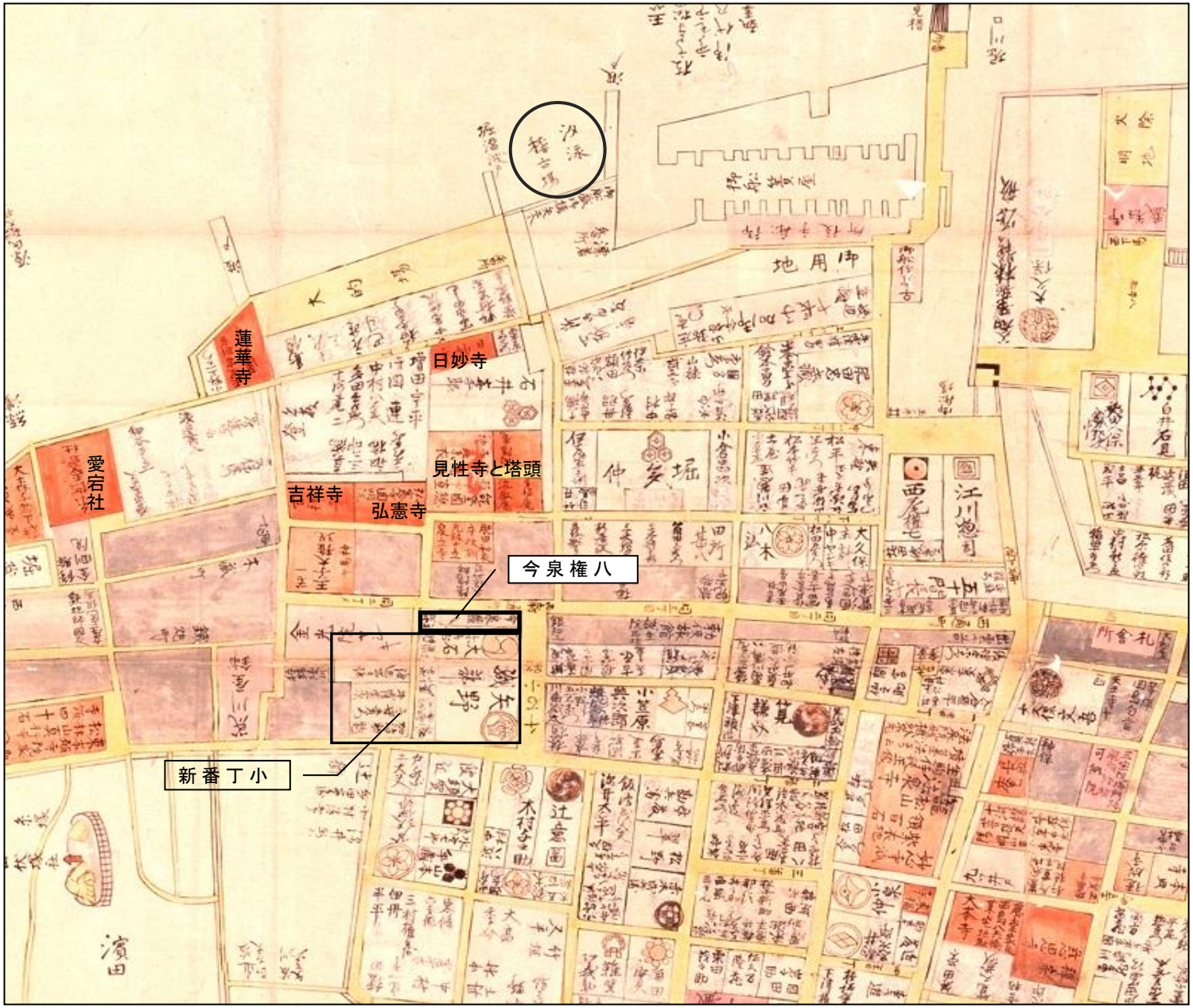
十　茂　奈良県生まれ　一八九八年～一九八六年

昭和五五年水任流保存会顧問就任

十一　英明　大阪府生まれ　一九二九年～（現在高槻市在住）

昭和六一年水任流保存会顧問就任

＊今泉家は、M三五年上ノ村（今の栗林～上之町）へ転居し、その後奈良から大阪へ移った。



高松城下町屋敷割図（部分）　香川県立ミュージアム蔵

弘化年間（一八四五年頃）

四　二間波止水門跡碑

（平成十九年三月十二日建立）　←石碑に刻まれている文言

二間波止水門跡

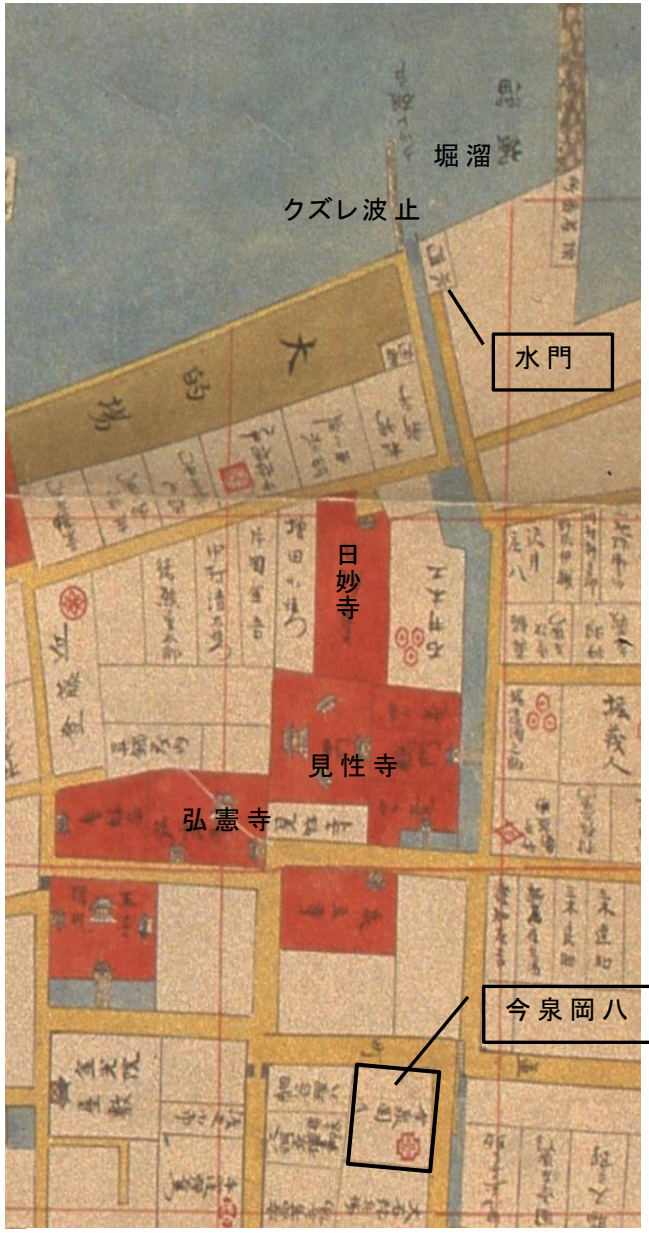
この石碑のあたりには、昭和四十年の埋立までは雨水等排水の水門があり道路の北側正面あたりで水門の両側へ海に向って波止が築かれていた幅が二間あったことから二間波止と呼ばれ、毎年夏、大的場海水浴場が開かれると上に監視小屋が建てられ游泳者の安全を見守っていた

東面には、水任流第十二代師範で高松市教育長を四期務めた三木嘉人師の泳ぎの句が刻まれている。

『高松に　生まれし泳ぎ　夏の潮』　杜雨

ここにあった波止は、明治中期以降は「二間波止」と呼ばれていたが、前頁の弘化年間絵図には「堀溜波止」と表記され、東方のお船蔵の出入口の長い波止との間には「汐泳稽古場」の表記がある。さらに、遡ること三十数年前の次頁に掲載の文化年間（一八〇四～一八）絵図（高松市歴史資料館蔵）には「クズレ波止」と表記され、「水門」も描かれ、水練をしていた海域は「堀溜」と表記されている。

左の文化年間絵図では、水門から南へ続く水路は日妙寺東から幅が４ｍ位に描かれ、見性寺の総門を超えて西へ回り込み南門に取り付いている。これからすると、単に排水の用だけではなく、小舟を運行し荷の運搬をするための運河の役割も果たしていたのではないかと編集子は推定している。



文化年間絵図（高松市歴史資料館蔵）

五　村山籌子之碑

（平成八年八月四日建立）

詩人で児童文学作家の村山籌子（かずこ）は、岡内千金丹本舗創業者岡内喜三（元高松藩士）の孫として明治三十六年南新町に生まれ、香川県立高松高等女学校を経て東京の自由学園に学び、「婦人の友」の記者として活躍したモダンガールであった。一方、高女時代には水泳部で活躍し二学年であった大正六年には早くも香川県教育会高松市部会游泳所の卒業証書を授与され、上京するまでの三年間は水任流泳法の模範演技を披露したり後進を指導するなど小先生（現在の水任流準教師）として活躍した。

上京後も、明治神宮プールや鎌倉周辺の海で泳ぎを極めていったが、戦下で医療・栄養ままならぬ中、昭和二十一年八月、結核悪化で四十二年の生涯を閉じた。この碑は、没後五十年にあたり高松葵ライオンズクラブの寄贈により建立された。

明治30年代と考えられる教育会游泳所（堀溜）の様子

中央やや右に突出しているのが二間波止。手前の大勢泳いでいるのが堀溜游泳所。二間波止の右は大的場海岸で明治41年からは女子游泳所がこの大的場前海岸に移された。大的場游泳場（海水浴場）として正式に開放されたのは大正5年であった。

★より道★　～糸より姫像～

糸より姫は後醍醐天皇（1318～1345）の第二皇女で南北朝の争いの渦に巻きこまれ讃岐の西浜の地に流され、そこで地元の青年と結ばれ6人の子供を生んだと伝えられている。姫は網糸をつむいだり、糸をよったり、地元漁師のとってきた魚を桶に入れ頭に載せて売り歩いて生涯を過ごしたとの伝承により、これが「いただきさん」の語源という。御霊は愛宕社に祀られている。

昭和45年10月26日建立

制作者　新田藤太郎

六　第十二代師範　三木嘉人歌碑

（昭和六十一年五月十日建立）

三木嘉人師は明治三十年生まれで本名は嘉光といい、広島高等師範卒業後、高松師範学校教諭を振り出しに丸亀高校を初めとする県内高校の校長を歴任し、県社会教育課長や高松市教育長を四期務めた高潔な教育者であった。同時に、水任流の名手であり日本水泳連盟範士・水任流第十二代師範として水任流後継者の育成に尽力された。そして、俳人・号「三木杜雨」として、泳ぎにまつわる句を多数残している。師は、昭和五十九年十二月に八十二歳で逝去されたが、その功績を偲び水任流保存会が発祥之地碑の横に師の句「潮筋にかかり遠泳太鼓打つ」を刻んだ句碑を建立した。

※三木師範の游ぎの句の一部を次に紹介する。

○初泳ぎ手さばき秘伝棒抜手　○伝えきし藩の泳ぎの水任流　○夏の海逆頭（さかっ）くらすしぶきあぐ　○高松のお城波間に遠泳ぎ　○女木よりの遠泳かるく泳ぎきり　○煎り豆を腰に大の字出来し頃　○遠泳の老いの総指揮赤褌

七　水任流発祥之地碑

（昭和五十六年一月三日建立）

寛永十九年（一六四二）五月二十八日に高松に入封した高松藩祖松平頼重（諡：英公）は、「讃岐は海辺の国なれば、水練は武道の一班（注：一部門）たるべし」として、自らも城の堀や御坊川で游泳するとともに、翌寛永二十年から、常陸国（水戸若しくは下館）から随伴した藩士今泉八郎左衛門盛行を指南役として、浜ノ丁の御船蔵傍ら（後にこの海岸は二つの波止に囲まれ堀溜（ほりだめ）と呼ばれていた）で藩士に水練をさせたと記録にある。この時、今泉八郎左衛門盛行は『游泳目録十二ヶ条』を作成し、頼重公に奉呈した。その中には「棒抜手游ノ事」、「肱抜手游ノ事」などの泳法が記されており、これらが現在まで伝えられている。

高松藩では水練が重要視され、居合・太刀・槍などの武芸とならんで当時は「御当所流（注：讃岐の泳法）」と呼ばれ毎年夏、土用の十日ほど前から三十日間、お船蔵西隣に設けられた水練所において藩士対象に水練が行われてきた。その際、藩主の前で披露される御前泳ぎも行われて水練の技が磨かれたと伝わる。第五代藩主頼恭公の時代には游泳期間中、大護寺（現在の英明高校の地にあった）で藩士の身命加護祈祷が行われていたとの記録が残されている。

明治時代になり、流祖・今泉家の流れを汲む星野平次郎が、古典の「善游者任水（ヨクオヨグモノハミズニマカス）」という言葉をもとに、これまで受け継がれてきた御当所流を、水戸の泳ぎ（水府流の源流）から伝わった泳ぎということで「水府流水任游泳術」と名付け、堀溜に水府流水任游泳術研究所をつくり後進の指導にあたるとともに、香川県教育会高松市部会の游泳部の師範となり、明治三十七年より市内の小学校・旧制中学校・旧制女学校・師範学校の全児童生徒を指導した。それにより当時の高松の人たちは、いろいろな泳法を身に付けて、神在の浜（高松市西部）、長崎の鼻（屋島）、女木島などから浜ノ町海岸までの遠泳を行っていた。

水任流泳法の特徴は、熨斗（ノシ）泳ぎの足使いである煽足（アオリアシ：両足で縦に水を挟む、対してカエルアシは水平方向に水を挟む）が他流と異なり、下の足を前方へ出し上の足を後へ引いてからアオル点にあり、昭和初期に明治神宮奉納演武大会で星野亀太、高橋数良らが、初めて「水任流」という流派名で、全国に正式発表した。

その後、絹漉清（一〇代師範）、三木嘉人（一二代）、川崎重男（一三代）、井筒（一四代）、福家恵美子（一五代）ら歴代師範によって伝承されてきているが、スピードを競う競泳が主流となって伝統泳法の游泳人口が減少してきたため、三百数十年の郷土の伝統泳法を絶やすまいとして、有志により昭和五十三年四月に水任流保存会が結成され、以来大的場海岸や玉藻公園で初泳ぎ・游泳祭を開催公開するとともに通年週二回の泳法練習を行って泳法の普及伝承活動を行っており、日本水泳連盟公認の日本泳法十三流派の中の一流派として知られている。また、昭和五十四年十一月二十七日には、高松市の無形文化財指定を受けた。

当発祥之地碑は、これらを記念して昭和五十六年に高松葵ライオンズクラブの寄贈により大的場海岸に建てられたものである。ただ、浜ノ町一帯は、廃城によって不要となったお船蔵の埋立てに始まり、鉄道の敷設や駅の開設、さらに昭和四十年頃からの大規模な埋立てによって様相が一変しており、おおもとの発祥地は別添地図の場所である。

※右は三木師範歌碑、左は上里文麿・小西道弘顕彰碑

■**藩祖賴重時代の游泳稽古場（発祥地）は〇印の場所と推定できる**

「水府流水任術游泳録（大正二年星野平次郎著、昭和十年三上節造写）」から、「旧高松藩ニ於テ游泳成立ノ事」の游泳所の記述箇所抜粋

「游泳所ハ大濱ノ丁海岸字堀溜　當時ノ御船蔵ノ傍ラ　即今ノ游泳場男子部ノ東波止ヨリ十三四間西堤防添砂処ニ毎年夏土用十日前ヨリ開始ス」

香川県指定有形文化財　高松城下図屏風（部分）香川県立ミュージアム蔵

【図１】

【参考】

香川県指定有形文化財　高松城下図屏風（全体）香川県立ミュージアム蔵

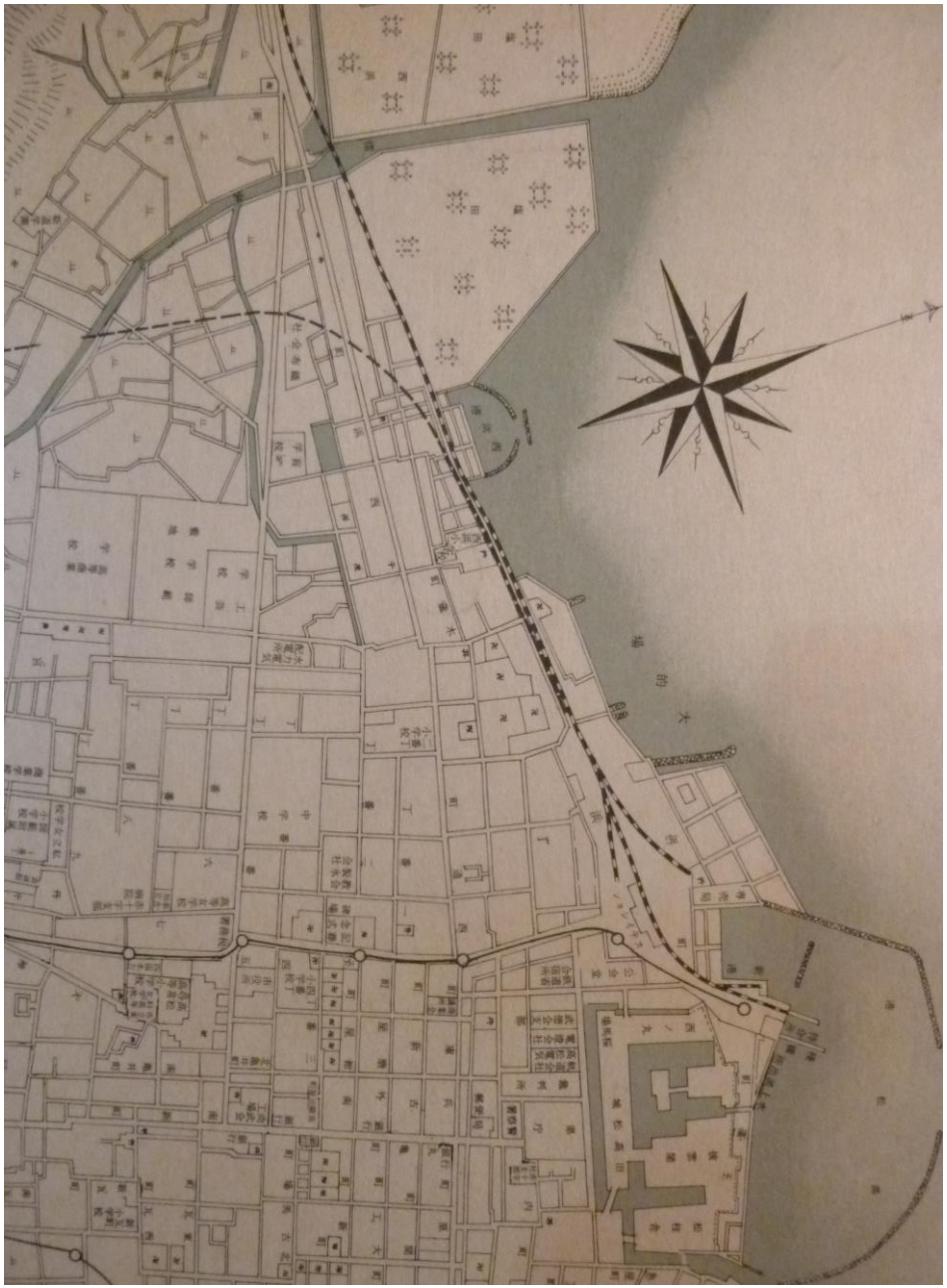
※〇印の場所が藩主頼重時代の游泳稽古場所（発祥地）と推定できるところ

■前頁の游泳稽古場（発祥地）を現代の地図に落とすと白〇印の場所になる

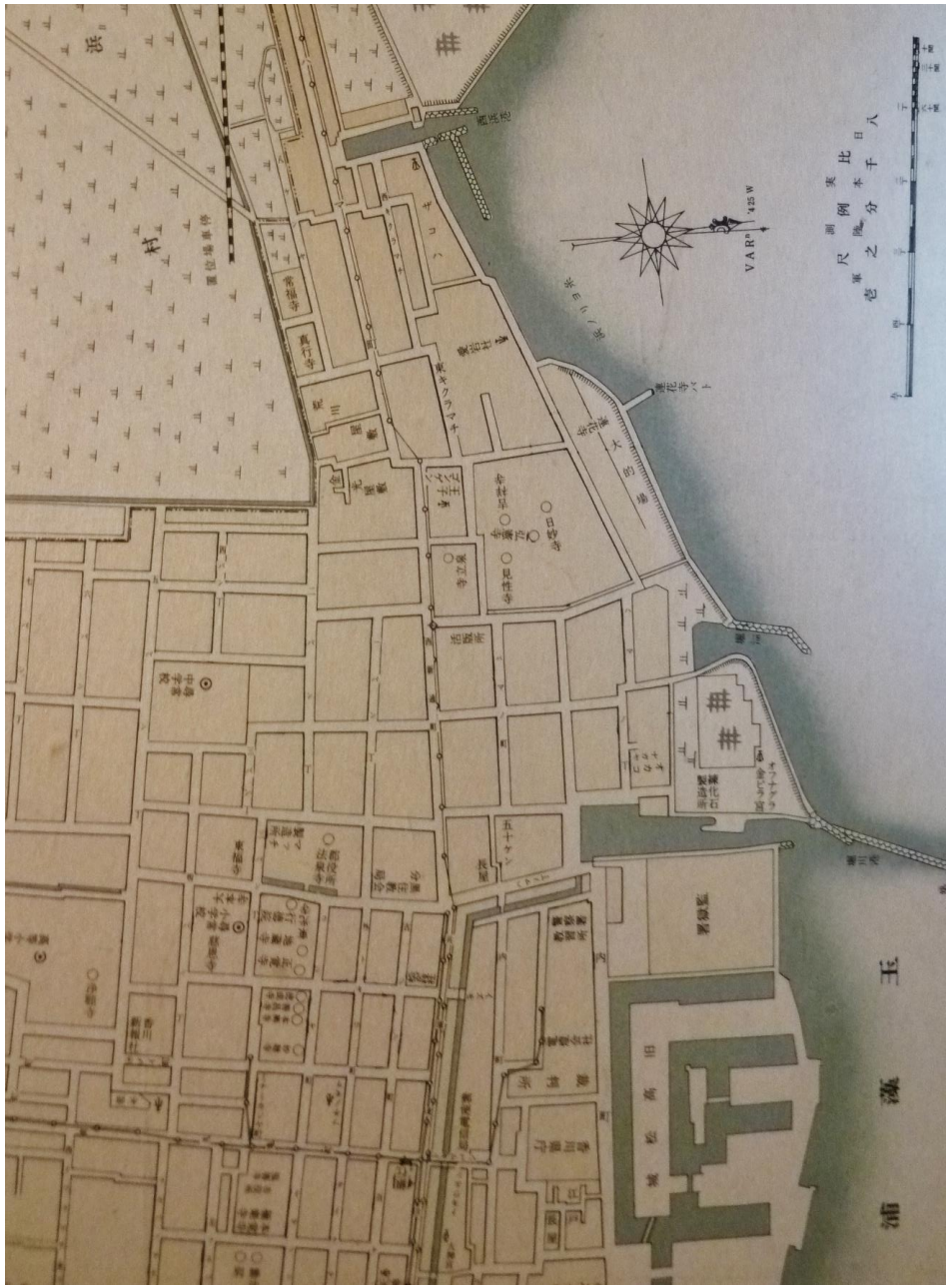
★印は、現在「発祥之地碑」が建っている場所、◆は元の日和山神社の位置

原図は、国土地理院「電子国土 Web」に一部加筆して作成したもの　※太線は幕末の海岸線、お船蔵、堀

【図２】



【参考】大正10年地図（高松市歴史資料館蔵）

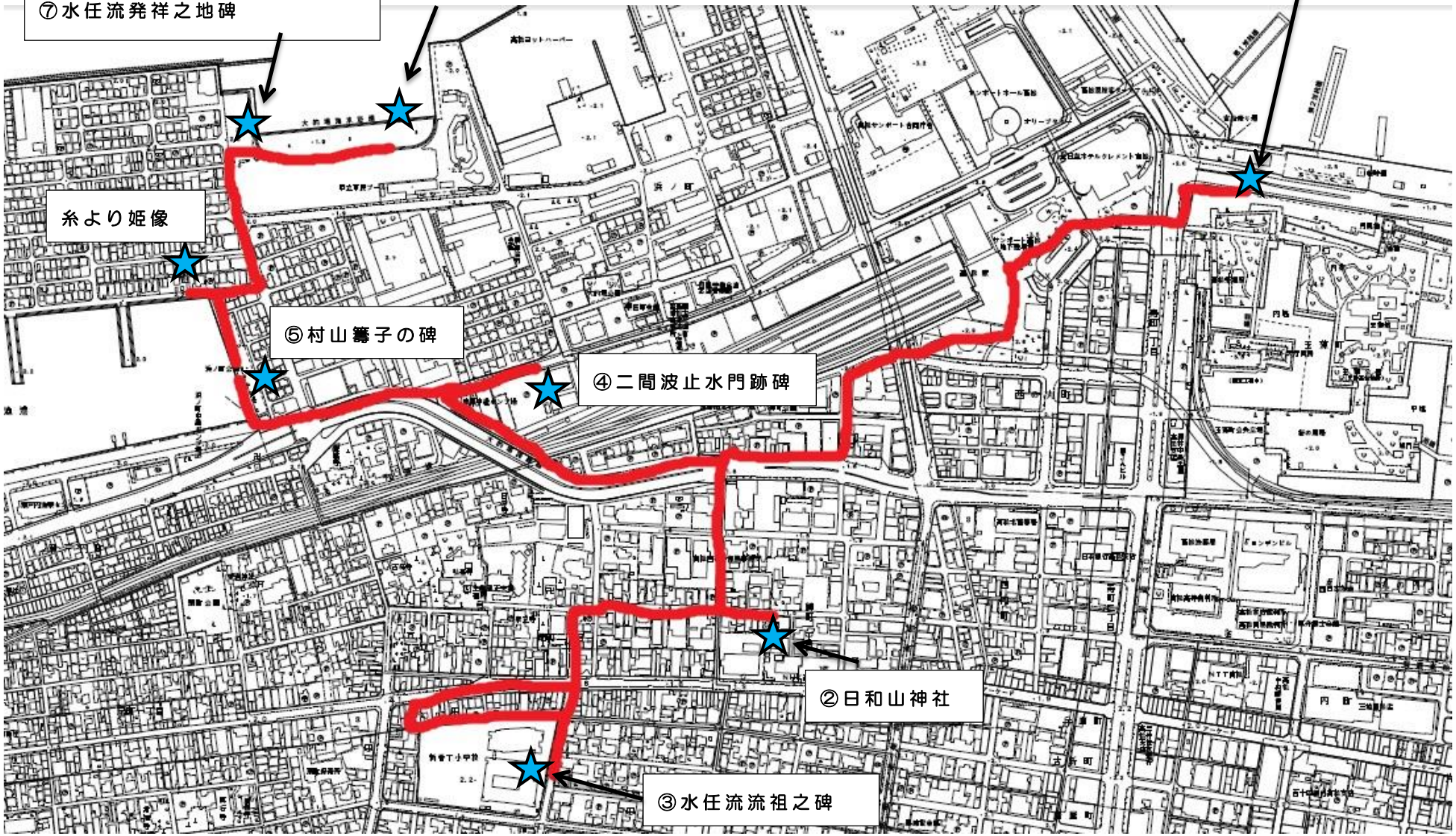


【参考】明治28年地図（高松市歴史資料館蔵）

【図3】

平成２９年７月ふるさと探訪「水任流の史跡めぐりと泳法見学」コース

出発地点：玉藻公園北側
①水任流保存会初代会長
松平頼明顕彰碑

⑥第十二代師範三木嘉人歌碑
⑦水任流発祥之地碑

水任流泳法披露